世說新語

乙

三五九

近世異説奇聞巻之三

亡魂改葬を願

東城の南にあたりまして、何かし寺といふあり。土地高うして、海原たるかに目をさへぎれば。そこともを限しらるまじ。水盡南天不見雲。雲ねに海がに沖にしらるゝ波るどいひたんかうまて。海れ帆新見えひかしまろ。雲に入りとうたりけり。をさはけりたれあみをく海などあまた。末の葉乃ちりうへ家やうにかどしらせ東ハ上げふさ。下げふさ。安房にけぐるし

山をとかよ。多上にうへ。ゆかとあやまさを。たの
うさは。牛龜の梢立ならび。うやこ鳥ありやなし
やは見えるども。角田川のながれちかく。晴なる
日よは。ほくぐ山をよく見る。春のゆふべ無あれ
ちりそふしとまし。入おの鐘に心とまゆし。
涼しき風に夏とまとを。望のふたしも
出る月は。たぐちにかゞうにむかふ心ちして。つも
きば人のむとなるてふともおりてぞ。雪れ晴
さふ夕られは。興つきてゆるともいひほべふ
あをしは。いまし年なありて。此寺にひと夜

登ぐらしまのありしに。明ほの望しささら
よいたんさなし。日のさし出るほど。よそまそ
見るべくもあらざ。かゝふ風京あるは。一しび
あり見し人をさらぬはなし。それが中にあふ
やどなれ人の母ぎこ。たゆくさまうで望
ひしまありしに。此京魚にんとのこし。ふ兵に
なくなりなは。此ちこそ見らめと常にのさ
まひしか。ふちまづらひて今はの時に。子なり
そる人と近づ無ふ死しなは。つもよいひし
ごとく。この音に葬せまよ。つもくれむぞと

いひおきて。ゆどなく身ゐうたまひぬ。志り
ゐに其家。先祖より父にあるまで。其ゝ葬
し寺あまたハ。それとおきて。他のなへとさめん
す。遺言とハいひながら安からぬすなれハ
さて。今までの香花院へれより葬をしに。其
夜。常にしたゝれし寺のとげそとたゝく音
を。な僧立出るまなるぞとひきをハ。何り
が母に侍り。和尚へ語めにかゝる。ゆゑ此ことを
て見まり。さよしやてたべとあり。此僧此婦
人のすとバ。うつ○て刻まりつ○にハ。のうもの侍

侍女婢などにまたくせらゐにて我ハ只獨
見たまふる不審にハおもひしかども。和尚
へかくとやかれハ。和尚を夜中に婦人の一人
見りて。我にあたんとハ。さてろえぬすとハおも
されしかどを。よし何すもせよ。こなたへとや
せとて。やがて出むかへ。客殿へ招じ。いかなることを
て。我中にハ見りたまひしやと問をかれハ。
うげからハ此世をさりし身なり。死せしのちハ。
此清寺へこそ集らめと。つ○に願ひ侍りし
故。いまハのさまにも。一向さるものとひ並

しに。えびからがのぞみにまかせざ。子なるものゝ
寺へ葬なり。此ゝ冥途の障となれハ。孫がいく
ハ子どもの方へ。此よしを告ゝまひ。もやくこの
法寺へ改葬たまはれかし。へさしくを和
まいらせるなり。此ゝ中さん為にこそ。こゝ
間でまいりつゝもとありけれハ。和尚此て結
むにハ此へども。遂ち移しゆへんゝ。こなたより
中をさんをいかなり。たとへ中をしらりとも。是
まで法出ありしゝよを間ことハ思ひたま
ひしじ。さりながらなきしなしとさしべきね

あらバ。此入身まもぬまでを中をしゆへんと
答らきれハ。さらバ是をしるしにとて。うハ着
とぬぎてまゝさましとゝるゝとれをへハ
夏のごとく。もつる姿ハ見えさなり。小そてハ
和尚乃手にのこまり。和尚奇異のゝにしひ
夜の明るを待て。とくかの婦人の子息れりと
へゆき。くわしく語らましに。主人を始め
家内の人々。れりひ合せるゝ其もしかハ。葬
し寺へさしとりといひて。さらやかに改葬
せらきなり。家中にこ時の人いまにながらへ

居たるをあり。はちへまうづるごとに。追善の念
まや。必はすを語りて。ち僧に呼せるなて。
予かたまる僧のかくりしなり。奇異のことに
れをひて。ち僧をたのみて。この墳墓へゆき
て見侍りし

清道白雲武術を争

虚無僧といふものいひ乃世よりもしゆれ
ことをたくさんと古きものにハ見えざ徒然
草に。ぼろくといへる是なり。兼好いとく。ぼろ
ぼろといふものむかしハなかりなるまや。ちかれ

世にはろんし梵字漢字なといひなるもの其始
なりなるとかや世を捨たるに似て我執ふかく佛
道を祢ふに似て闘諍を事とせかくのことく
なきたまハ元亨建武より少し前にもしまれる
なるへし

むかしこゝに清道と
いふものありしと武士にて真影流の劍術乃
奥義とさハめ兵術を指南しなるかちまさに
妙を得しかハ不の者とも尊敬しなる又白雲と
て是を一刀流の極意を得たりなれハ凡いかなる
者なりとも太刀筋乃てりにおいてハ敵に敵せる

ものハみなし清道が弟子とならずといふことなし
何の功ともなすがわるんすしきみしりし清道とも又
白雲とのまじはりにはうときとも勝負合ねば
つかねのしうといひあへり或人同寺に住居する
すうれハある時たがひに太刀筋理合の論に及び
足下修行の一流中々とといふともいまだ未熟
と思ふを一朝に詞のみすそちやうくといふハ無
益のことなりいざ勝負をこころみ足下に及ばずバ
一刀流をやめ足下の流に改め師弟の契約をなし
もし足下まけたまひなバ真影流をすてゝ家
が流にあらためらるまじきやといひけれバ。清道
聞て尤なり。いづれがまけたりとも。たがひに遺恨ある
べからず。木刀といひながら。あたり所によりて
即死もあるべし。それとても此境界なれバ。
うらむべき命にあらず。さハおぼさずやといひ
ければ白雲ハ。のぞむ所なりと。日を定め。各流儀
の木刀をとりてむかひ。清道ハ八相にかまへ。
白雲ハ正眼にかまへ。白雲ゑいといふ声と共
に。いなづまのごとく飛入て太刀をふれバ。清
道が胸をつきかへして打おろしぬ。清道

がうれたる刀ハ。白雲がまつかうまつかくあこ里
かまハ。一たる刀まておすゑたり。さいきほひ弱
常の人乃まぐにあらぬ。其時白雲木刀となげ
さて。清道が前に云ぐ間づき清たる刀筋なのく
企及べからざ。約束のめく。今日より。二心なれ間
さしの門弟になりたきよしいひれハ。清道を
白雲れたる刀筋。吹しに間ちあれたまのふる
まひ。感じ入り。志かしながらいひかんせしなれハ。
辞退せんハ。却て隔意ある小似てまバとて。是より
師弟の交無二の中となり。修行志かるに。後

にハつひ身のみとすさ。進退の疾し。清道にも
れとなまじと。諸人賞歎志かり。常に此二人ハ
家の身にそふごとく。行住坐臥とりに同じく。志ハ
らくをおもなるまなく。小魚の思ひとなせり
志かるに清道。人の敬ふに志さがひ。おのまが術
に傲慢し。傍若無人のふるまひ甚しく。師の
命令にそむき。法券乃法式を乱しあまハ。
諸人大に不しミ。かまとうしないだやとれり人
どもを。力を以てあらそたんなる及がたく。其上
白雲つ〇に清きそひ居まハ。二十人三十人

力を合せともかゝるべきにあらざれとより僧
徒のるゝれハ。寸鉄をもたくはゝるゝ制禁して
尺八を腰にさしてのゝるれハ。りし法にそむきて死
罪に行ふまゝなれても。尺八にて打法式とかや。
しかるに清道がいきほひにおそれて。誰うたんといふ
ものもなく。月日をゝしかるに。白雲ハ師の急用とて
遠方へ使にをし。そあとにて。清道を打殺さゞ
しといひ合せ。そ比諸流のもさまども入こゝ
し中にて。そうもの志どももすけを定めち門さ
どく呼あつめ。清道に用事ありとてよび

なきゝ。かゝるまとハ夏をうつも志らざ常のこと
に来りしに。熱くるゝはりなる茶をあたへ名まゝ
何ぞもなくのむ不と。茶碗をおゝるゝを。しきて
ふ打あげられハ。そ茶面にさぶとかゝるとひゝ
しく。火入の灰を面に打かけ。二人一同に打かけ
を。眼ハくらゝながら。二人ともにてかさへ。ぞの下に
引ぶしきたる。そ時大勢よりて。尺八をいて。終に打
殺しぬ。かまが武術に長ぜるをいて。諸人ゝつれと
へるに乗じ。自高ぶり人を蔑まし。おのまゝが
術なにかへして身を亡せり。羿善射奡温舟俱

不得其死然々南宮造かいひしを。孔子の君子
なるかとのたまひしハ。徳とたのしとびて。射と
力とをこのしとびざれハなり。清道もし此意と
しらハ。何ぞかくあさましき死を致さんや。いづ
れも清道をよくむあまりに。死かげ○を取ふ捨
むとて。四五人いひ合せ西彰田といふ所の原に捨
て。さても清道をどのもれなれども今頃ハ豺
狼の餌となるべき不便さまといひて。ゆらんと
せしにかのしかぢ○むくしと起腰にさしたる大八
とぬき出し。あとさがりしものを。只一打にうち

ころし。其上にたふまて。わとのごとく死しなり。一
ひび死せしもれ。人をうち殺しなるす。ふしぎ
なることならずや。是を見しものども。ほに祟を
なすべきやと。おそれをのこきて。古中に埋死家
とつき。清道塚とて今にあり。打殺されしもの
をも。其かくいふに埋め塚をつきたり。白雲ハこの
事を聞て。切方志らざるりしよし。此清道を
昼夜無法を修行し寺より半里ばかりこれに。
萬光寺といふ寺の林乃中に。二ひばかり乃松
あり。松なし此松をおそとなし。そのうちを試

ゐるよしまて下の方ハ打枯したるが。今にのこりて。清道松とて古跡になりぬ。予が祖父ハ常陸のかみにて。清道が兵法を学びたり。祖父がめしつかひし。中野清右衛門といひし者。清道が弟子にて。免許状を得たりけれハ。かれが弟子より傳て。今にそれに。京流の形のこまり

越後國の鑿怪物を見あらはせ

越後國或城下に何某といふ鑿師あり。こゝかき時ハ。勇猛の性質にて。刀劍を試ふことを好ミ。さしき物を切て樂とせしが自節を折

鑿學を專にし遂に其術に精く城下にて一二とあらそふ鑿師なりしかば。同國乃内にて。或諸侯聞及たまひて拓まゐまくハ。拓に應じやがて其地へ引移なり。住居相應の處望にあらせたまいるべし。空宅もあれバ。いづれの所なりとも願ふる所しと。有司よりいひこされしに。其比人の住ぬ老屋のありしを。ゆきて見るに。もとより人の住居せしとおぼえて。家作つぎくしく。内外造作美を尽せり。かゝる家を。何とて空宅にすして。れの

ゐるやと人にたゞ。此家には夭怪ありて。度々
主はかなきぞも。久しく住遂家人なれば。
近き比はのぞえて移家人なし。さるにすりて。
今よりくれたしといふ。此醫師物におそるゝ
と志らざ。ゐるゝをぬむ生質なれば。そまこそ
のぞむ事なきとて。此家をたまはりして祢がひ
なきは。諸事同いづきも詞をそろへ。かの家は子
細ありて人の住居なりがたし。さやうのを知
ながら。自分祢がひといふ事を立がたれば。他の
事を願はきしるべしとありければ。妻子細と

ゆるすは。人の掛ちりまてうまたまわりぬ。さやうの
すはあるしかたぞ。祢がひの趣よろしく
俗立らき下されなば。なほ皇乃玉ならんといひ
なきは。さてく自分は膽のふとき人なる。姜
維ともおもうまじと。いづきを笑ひける。さて
望にまかせかの宅とあまわりなきは。夭怪とは
いかなるのあるやらん。妻子ともに引うつ
るなれば。まづ我一人ゆきて。ちくろうんとおも
ひて。普代の僕乃六十ばかりなると。一人ぐして
ゆき。茶と煮させ。其月は燈のもとに。おもへ

の書をしてしめ居るが。けしくわれよ。大刀
小刀をかくいふに並なれば。さまでをすれるの
出しを。さるほどにきをれすもはらぶ。若しから
ばうろうえをの名を浮んハ口をしかるべしと。大
小ともに。床柱にしかとゆひつを並。いかるに
をのすりしも。まどりにてせめと待居るに。
屋敷をふけて。おきふる宿の形りに月の影
くらく。楷として風の青さへをのすごく。
さとハ今てそとおりふをりふし。しハがきたる
聲まで。しえふき二三呼えられハ。僕を呼て

今のハ誰なるぞと問ひきハ。しかに小新屋のさふ
らふがき内とこそ呼てゆへといひられハ。うち
笑ひて。いかさ毎夫怪しもせよ。ふにたまいり
し歌なきハあるひもなく卒爾にハ出まじ。
しハぶきせしハことなりなと。驚く事しきり
をなかりけきハ手男氣にやおそれけん。手夜
ハ何なりをなかりしが。更ゆくすれ睡りにほ
しけきハ。床ぶらを枕とし。明るをしらぶ熟
睡しあり手頃の頃。よひにハ轉寐し。ぬけ
るる比より起居。昨夜のごとく待居るに。

何かハ志らねど縁がはを大男のありく跫音せり。因へのながめをとめんと。腕あらはしてまちゐたりしが。又音をせねど。丑の時も過。寅まもすぎるんとおぼしきに。たくの方まで。おまへ人のあゆみて。れどもふ聲すぎおぼえ乃捬子にもさびしき給ふどのやうに。かしこくとるる音聞ゆ。其和天井の上にも聞え。又えんの下にもとさぶらに聞つまきがきし。耳をすましてよく聞定め。志ばらくありおみすれずなりぬ乃ま音かのふ和へ走へ。大音まて急いといふて

板をぬけよとふみならしぬれハ。此音に驚きならすぞ。うまげらせておとかくさもなし。縁の下にそふれるをとりて。板をとりのけて見るに。柄の絶たる錫杖あり。（錫杖ハ長さをのする山伏のもつハ絶し）彼ありし音ハ是なるべし。此錫杖よりぞ怪あるをべきなりとて。取てとさめ置しに。そのち何事もなく。今にも家に住居せり。其錫杖今に有と語りし。此醫師亭よく知れり

日像上人の木像靈異

下総國平賀本土寺ハ日老上人開基にして。

日像上人出産の地なり。塔中十二坊あり。又佛持院林藏院とて兩院家あり。林藏院に日像上人の木像ありて本尊とせり。又誕生水といふ井あり。上人の産湯に用し水なりといへり。眼疾を患ふるもの。此水を以てあらひ。又大病の人に藥とせんじ服せしむれハ。しるしあり。又産婦乳汁出ざるに。此水にて粥を炊きたるにハ。乳よく出ずるなど。是のミに限らず靈驗あらたなる木像なり。毎年十一月十二日にハ。糸詣群集し通夜して。説法を聽聞し題目を唱へて夜を明せり。田舍にハたがひなく。小ぎハしき寺なり。さるにより。村をむさぼるものにまぎまやありけん。ある時此村等を盗りしものあり。道のほど十四町ばかりを行しに。重きこと磐石乃おもしまして堪がたく。捨おきてにげんとされども金剛さくみてうどかど縛らきたるごとくにて。其所をさることあたはず。馬橋村萬満寺といふ寺の前に居たりしかば。かの寺よりかくとしらせしによりて。村土寺よりあまたの人

いそぎ来りて。なぞるを取へし。盗人とバその
まゝにて罪をゆるしけれハ。もとのごとくにより
てまげ去けり。又本土寺の領内林藏院の傍
に圃あり。其中に冢あり。石碑あまどゝ文字
を刀えんぞ。是ハ日像上人の母。妙浪尼乃墓
なりといひつゝへり。碑面をよくあらひて見
けれハ。この尼の墓なること分明なり。圃の中に
ありてハ。糞土の穢あまたハ。林藏院の山上へ移
さんとて。元文乃比冢を掘穿あるに。柩を骨
も朽たて。少をかゝらなく。婦人の髪のこ
のこまゝ五百年まを及ぶべきに。髪ハ朽に
ことなり

近世異説奇聞巻之三終